

Investigation on Nursery Awareness of Male Students in Nursery Teacher Training School

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-07-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田畑, 光司 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/519">https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/519</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 保育士志望男子学生の意識について

## Investigation on Nursery Awareness of Male Students in Nursery Teacher Training School

田 畑 光 司

TABATA, Koji

With an increasing number of nursery teacher training schools, the enrollment of male students is also on the rise. Male students are now considered to have tendencies or problems that were never seen before. We studied the awareness of male students wanting to become nursery teachers by examining their written self-introductions, self-portraits and answers to questionnaires. The subjects were first-graders at nursery teacher training schools. We obtained written self-introductions and self-portraits from 103 male students and 238 female students, as well as answers to an awareness questionnaire from 107 male students and 236 female students. As a result, the self-introductions written by male students reflected a tendency of trying to show themselves in the best possible light as a person rather than consider their own position as a teacher in society. Meanwhile, their self-portraits indicated that they tend to depict themselves focusing more on their own self-image than their wish to make people understand themselves. Their answers to the awareness questionnaire showed no significant gender gap in knowledge about children, but there were some differences in experience and attitudes; for example, male students tend to have distorted self-confidence. We consider it important for teachers to advise their students on the premises that there are such differences in awareness between male and female students.

### はじめに

近年、保育士養成校が次々に新設されている。全国保育士養成協議会会員校のうち4割近くが、平成10年度以降に新設された養成校である（全国保育士養成協議会、2007）。このような門戸の拡大化に応じて、保育士を志望する男子学生も増加している。女性的な職種であるというイメージが強かった保育士で

あるが、とりまくさまざまな社会環境が変化していることの反映だろう。保育士志望男子学生を対象とした報告には、男子学生数増加の経緯（佐藤、2005）、彼らに対する現場からのニーズ（本多ら、2006；中田ら2005）、保育観（芝崎、2003）、生活実態（笠井ら、2002）、養成カリキュラム（田辺、2010）、研究動向（高嶋ら、2006）などがある。いずれの研究も2000年以降の発表であり、保育士志

---

キーワード：男性保育士、描画、意識アンケート

Key words : male nursery teacher, drawing test, aptitude questionnaire

望男子学生の問題がきわめて最近のものであることを示している。保育士養成校において、学生生活はもとより授業・実習・就職などの面でも、男子学生の増加は新たな問題を生みだしていると思われる。

かつては、保育士を志望する男子は、男性であるがゆえの問題をあらかじめ承知している、という無言の前提があったように思う。しかし増加する最近の男子学生について、志望動機や職業意識などが、これまでと同じままであるとはいえないだろう。例えば、女子は、小さいころから保育士になることを志向し入学するものが多いが、男子ではそうではないこと（中田、2008）、性格検査上では男子と女子に差は見出せないものの（佐藤、2009）、職業適性検査（SAIテスト）では男子に適性なしとするものが多かったという（金ら、2008）報告がある。これまでの男子学生とは違った意識をもつものがあることも考えられる。本研究は、最近の男子学生が、保育士という職種に対してどのような意識を持っているのか、その特徴を明らかにしたいと思う。そのことは、彼等に特化した学習支援活動に向けた情報を提供できることにもなると思われる。

## 方法

### 1 対象者

埼玉県内某保育士養成校に在籍する1年生を対象とした。この養成校は、2005年度に新設され定員の2割から3割が男子学生であった。

### 2 手続き

#### 1) 期間

2008年から2011年までの4年間にわたり、

毎年の4月から5月の授業時間に、自己紹介文・自画像の作成、意識アンケートを実施した。自己紹介文・自画像は男子103名、女子238名が対象であった。意識アンケートは男子107名、女子236名が対象であった。表1に年ごとに実施した学生人数を示した。回収用紙には、「これは授業を進めるにあたり、受講生の関心を知るためのものです。個人の情報収集ではありません。結果は個人名を伏せて集計し、今後の授業ないしは研究資料として使う場合があります。そのような使い方を望まない場合はチェックを入れて下さい」という文章を印刷した。承諾を得たものについて集計した。

表1-1：自己紹介文・自画像 対象者人数

	2008年	2009年	2010年	2011年	計
男子学生	27	23	32	21	103
女子学生	44	72	55	67	238

表1-2：質問紙 対象者人数

	2008年	2009年	2010年	2011年	計
男子学生	27	25	34	21	107
女子学生	41	66	58	71	236

### 2) 自己紹介文

A4用紙の上半分を自己紹介文スペースとし、「あなたは実習に来ています。今、子どもの前にいます。あなたの自己紹介をしてください。（幼稚園でも保育園でもどちらでもかまいませんし、相手となる子どもの年齢も自由です。）」という文章が印刷してある。

### 3) 自画像

A4用紙の下半分を自画像用スペースとし、「実習に来ているあなたは、子どもから似顔絵（全身も）を描くようにいわれました。ここに描いてください。」という文章が印刷し

である。自己紹介文と自画像はまとめて実施した。時間制限は設けなかったが、おおむね20分程度で終了した。

#### 4) 意識アンケート

A5用紙に20の質問が印刷され、「はい」「いいえ」欄に○をつけるようになっていた。質問項目はまだ授業経験の少ない1年生でも答えやすい平易なものとし、子どもに対する経験を問うものが3つ、知識を問うものが8つ、態度を問うものが5つ、自信を問うものが4つ、から構成されていた。時間制限は設けなかったが、おおむね10分程度で終了した。

#### 5) 結果の整理方法

##### a) 自己紹介文の分析

文章中に、自分を「わたし」や「僕」などでなく「先生」という社会的呼称で表現したものが何人いるか、その人数を数えた。さらに、「子どもたちへの挨拶」、「実習に来た目的」、「実習期間」、「自分のアピール」の4つがおりこまれた場合を完成度の高い自己紹介文として、4つをおりこんだ紹介文を作ったものの人数を数えた。

##### b) 自画像

頭と身体の比率、いわゆる「頭身数」を視察で判断し、1頭身から7頭身までの出現者数を求めた。

##### c) 意識アンケートの分析

質問に対する「はい」の出現数を数え、回答数で除して出現率(%)に換算した。無回答ないしはいずれにも答えたものは、集計から除外した。

### 結果と考察

#### 1 自己紹介文 (図1参照のこと)

「先生」と自分を表現して自己紹介をしたものは、平均では男子26.8%、女子35.8%であった。(例:「先生の名前はねえ、○○です。」「今日から皆の先生になる○○です。)」この数値について男女に有意差は示されなかったが、男子は女子と比較して自らを「先生」と呼ぶものが少ない傾向にあった。

1年生である学生は、実習の指導などは当然受けていない。今の自分にあるイメージに従って言葉を選んで使ったと考えられる。「ボクは・・・」「わたしは・・・」といった身近な表現である一人称を使わず、社会的な立場を強調する「先生」を使ったことは、「先生でありたい・なりたい」という気持ちの反映であろう。一方、始めから社会的な立場を強調することで、未経験の実習における子どもとの関係をうまく進めたい、不安感を隠したいという意図があったことも考えられる。男子が「先生」より「ぼく」「わたし」を使用す

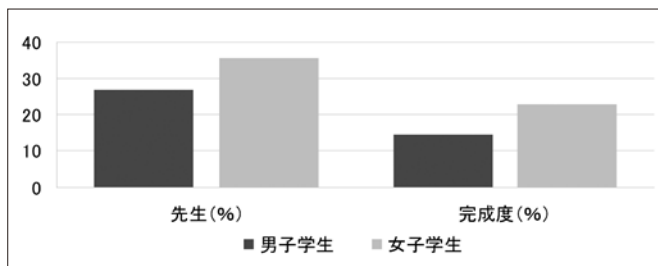


図1 自己紹介文

るものが多かったことは、社会的な関係性を強調するよりも、自分と子どもが対等な関係にあることを伝えようとしている姿勢が女子よりも強かったことも考えられる。逆に女子は、積極的に「先生」であろうとして、この言葉を使ったのだろう。

完成度の高い自己紹介文（「挨拶」、「実習の目的」、「実習期間」、「自分のアピール」をおりこんであるもの）を作成したものは、平均では男子14.5%、女子22.8%であった。この結果に有意差は示されなかったが、男子は完成度の高い自己紹介文が少ない傾向にあった。

男子が「先生」と呼称するものが少ない傾向があったことあわせて考えると、自分が「先生」という立場から自己紹介をするよりも親しみやすい「お兄さん」としてくださった立場から自己紹介をしようとするものは男子が多かったといえる。女子ではその逆であったのだろう。自己紹介場面を想像して、女子は「先生」というタテ社会的な立場を強調した自己紹介文を作り、男子は友だちというヨコ社会的な立場から自己紹介文を作った、ともいえるだろう。

## 2 自画像

図2は、平均頭身数の比較を示したものである。男子の平均頭身数は4.06、女子は3.22であり、男子が大きな値であり、有意差があった ( $t=2.71$ ,  $P<0.05$ ,  $df=5$ )。男子の自画像は女子と比較して、体幹が長くスタイルのよいものであったといえる。

人物画における頭部の大きさは、成長に伴って小さくなる傾向があり（三上、1995；高橋、1974）、頭身数の増加は、漫画的ないしは幼児的自我からの成長を反映すると考えられる。大学生の場合でも、1年生よりは3年生が頭身数の大きな人物画を描くことが報告されている（田畑、2007）。男子学生は女子と比較して身長のある、大人びた印象を持たせる人物画を、女子学生は頭と身体の比の小さい、マンガのようなかわいい印象を持たせる人物画をそれぞれ描いた。男女は同じ学年であることから、頭身数の違いは、報告にあるような成長の違いを示しているものとは考えにくい。実習という場面で、自己を相手にどう伝えるのか、という意識が自画像に示されたものと考えられる。男子は背伸びした大人っぽい自己を実習相手の子どもに示そうとして描画し、女子は自己を愛らしい可愛い

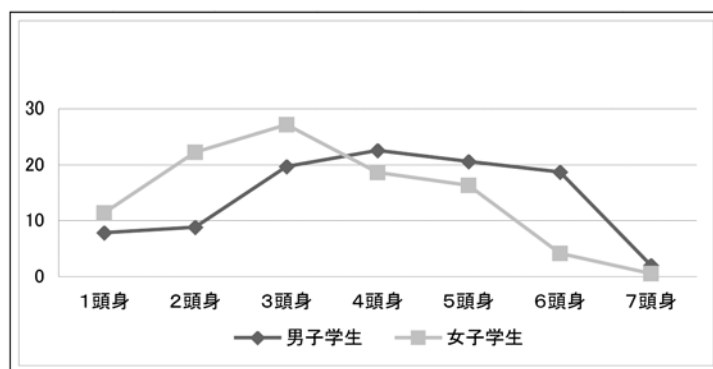


図2 頭身数の比較

ものとして子どもに受け入れてもらおうとして描画したともいえる。

### 3 意識アンケート

表2に、「はい」と回答したものの出現率を示した。「20男性保育士が少ない理由を考えたことがある」では男子64.8%、女子32.4%でその差は32ポイントといちばん大きかった。出現率に有意差のあったものは「1障害児と遊んだことがある」(男子36.1%、女子47.7%、 $t=-2.394$ 、 $df=5$ 、 $p<0.05$ )、「15どんな子どもでも仲良くなれると思う」(男子82.8%、女子72.7%、 $t=-2.086$ 、 $df=5$ 、 $p<0.05$ )、「20男性保育士が少ない理由を考えたことがある」( $t=-3.388$ 、 $df=5$ 、 $p<0.01$ )、の3項目であった。

1から20までの質問項目のうち、その質問

内容から1、2、6を「(児童養護児などとの経験」、9、11、15、17を「(子どもを相手にする)自信」、5、8、13、14、18、19、20を「(子どもを相手にする)態度」、3、4、7、10、12、16を「(子どもに対する)知識」を知るための質問カテゴリーとする。以下、そのカテゴリーの傾向を比較する。

まず、男子における児童養護児などとの「経験」は、「1障害児」と遊んだことは少なく、有意差があった。「2片親家庭」のような社会的養護の必要な家庭を知るものも少ない傾向があり(男子75.1%、女子83.9%)、かつ「6街中で障害児が来る」と離れてしまうものが多い傾向があった(男子8.2%、女子3.9%)。入学までに児童養護児や障害児と接触する機会は男子でも女子でも同じであろうから、「経験」の結果は、男子がそのような場面を避け

表2 受講アンケート項目と「はい」の出現率(%)

No.	質問項目	女子学生	男子学生	
1	障害児と遊んだことがある	46.2	37.2	*
2	片親家庭を知っている	82.3	74.9	
3	虐待する親には厳しい対応をするべき	56.9	55.3	
4	障害児は遺伝が多いと思う	28.6	27.8	
5	茶髪の保育士がいる園でも気にしない	12.6	26.5	
6	街中で障害児が来ると離れることがある	4.3	10.9	
7	いじめられる子にも問題があると思う	33.3	32.4	
8	就職は障害児のいない園に行きたい	16.5	32.5	
9	発達相談をうまくやれると思う	7.3	8.6	
10	非行は環境の影響が大きいと思う	93.0	91.4	
11	いじめ相談をうまくやれると思う	30.0	46.5	
12	障害者自立支援法を知っている	17.1	23.9	
13	心理治療カウンセリングに興味ある	79.7	73.5	
14	母親は父よりもしっかりしないといけない	32.8	34.1	
15	どんな子でも仲良くなれると思う	72.6	83.4	*
16	子育てを面倒に思う親が多いと思う	60.7	73.5	
17	保育福祉の相談に応える自信がある	85.3	84.4	
18	保育士の茶髪は個人の自由である	43.1	41.5	
19	障害児は専門家が保育するべきだ	22.5	35.7	
20	男性保育士が少ない理由を考えた	32.9	65.7	*

\*は $p<0.05$ で有意差あり



てきたことに対して女子は避けることが少なかったこと、いかえれば職業としての保育士を意識していたことを示していると考えられる。

次に、男子の子どもを相手にする「自信」では、「15どんな子どもでも仲良くなれる」ことに自信を持つものが多く、有意差があった。「17保育福祉の相談に応える」自信は男女であまり差がなかったが（男子87.1%、女子84.7%）、「9 発達相談」には自信がない（男子6.5%、女子8.2%）が、「11いじめ相談」には自信がある（男子39.6%、女子29.5%）という結果であった。男子は女子よりも子どもに対する「自信」を無前提的にもっていたようである。

子どもを相手にする「態度」では、男子は「20男性保育士が少ない理由」をよく考えており、有意差があった。「5 茶髪の保育士でも気にしない」ものが多かった（男子21.1%、女子14.4%）が、「8 障害児のいない保育園に就職」を希望するものが多く（男子26.7%、女子15.6%）、「13心理治療やカウンセリングへの興味」は女子よりも少ない（男子74.2%、女子82.0%）という結果であった。男子は男性である立場は考えているものの、専門への勉強の意欲は高いとは言えず、茶髪など外見は気にしないが障害児の問題を敬遠するという、やや短絡的な態度が示されていたともいえるだろう。

子どもに対する「知識」については男女では有意差が示されるような大きな差はなかった。

これらをまとめると、保育士を志望する男子学生は、知識では女子と差がないが、専門的な勉学意欲は高いとはいいがたく、障害児や児童養護児らの実態を避ようとしている傾

向がある。自分が男子であるがゆえに、男性が保育士に少ない理由は考えているものの、あまり具体的な努力をしようとはしていない、といえるのかもしれない。

男子における問題点が、本研究の結果からいくつか見出される。先行研究からも、保育志望男子学生は女子と比較して問題のあることが指摘されている。男子の受講態度が悪いので次からは男子を敬遠し、女子を優先的に合格させることになった（佐藤、2005）、適性検査から、女子は適正なしが45%であったが男子は70%であった（金ら、2008）など、男子にとっては肯定的な報告はあまり見出されない。本研究の結果も、これらと同様であった。だが少子化と保育を取り巻く環境の変化が進む現在では、現場からも男性保育士への期待が増加している（堀、2000；中田ら、2005）。男女を一律に指導するよりも、男子学生の特徴を十分に把握して、従来のスタイルを変更する時期にあるといえるだろう。

### 今後のために

今回は入学直後の学生が対象であったが、学年進行に応じて学生の意識も変化する。中田（2008）は、質問紙調査の結果、入学時と卒業時では男子学生の保育カテゴリーに変化があり、性的属性を意識するようになることを報告している。今回示された男子学生の傾向が、学年に応じてどのように変化するか、追跡する必要がある。それは今後の課題としたい。

### まとめ

保育士志望男子学生の意識について、自己紹介文と自画像、質問紙から検討を試みた。対象は保育士養成校1年生であった。自己紹

介文・自画像は男子103名、女子238名、意識アンケートは男子107名、女子236名が対象であった。その結果、自己紹介文からは、「先生」というタテ社会的な立場よりも、友人というヨコ社会的な立場をとろうとする傾向があった。自画像からは、相手に理解してもらうよりも自分のイメージを優先して描画してしまう傾向があることなどが示された。意識アンケートからは、子どもへの知識は男女であまり差がないものの、経験と態度にいくつか違いがあり、男子はかたよった自信を持っている傾向のあることなどが示された。男子と女子にこのような意識差があることを前提として、学生に関わってゆくことが必要であると思われる。

## 文献

- 堀健治・加藤陽平 (2000). 男性保育士の実態に関する調査研究—N市民間保育所を中心に— 日本保育学会大会論文集、53、630-631.
- 本多潤子・小林育子・櫻井登世子・安村清美・鈴木力・成田眞・高嶋景子・中原篤徳 (2006). 保育現場において認識されている男性保育者の特徴 田園調布学園大学紀要、第1号、153-176.
- 笠井里津子・川口愛子・加藤かおり (2002). 男子保育者志望学生の体力評価および生活実態調査報告 日本保育学会大会研究論文集、55、352-353.
- 金 俊華・林 幸治・緒方 章嗣 (2008). 保育士養成校におけるキャリア教育—適性検査と就職動向との関連について— 近畿大学九州短期大学研究紀要、38、39-47.
- 三上直子 (1995). S-HTP法 統合型HTP法による臨床的・発達のアプローチ 誠信書房
- 中田奈月 (2008). 保育者養成課程の学生による「保育者」カテゴリーの付与と引受 奈良佐保短期大学研究紀要、第15号、47-56.
- 中田奈月・前迫ゆり (2005). 男性保育士として仕事を続ける—在学生・卒業生・現役男性保育士のワークショップ— 奈良佐保短期大学研究紀要、第13号、79-94.
- 佐藤実芳 (2005). 関西の幼児教育・保育系の短期大学における男子学生の進出の考察 愛知淑徳大学論集—文学部・文学研究科篇—、第30号、21-34.
- 佐藤信雄 (2009). 保育学生の人格的発達に関する縦断的研究 P-Fスタディの図版を使用して 北海道文教大学研究紀要、第33号、99-108.
- 芝崎良典 (2003). 保育士養成課程に在籍する学生の性役割認知と保育観 広島大学心理学研究、第3号、169-176.
- 田畑光司 (2007). 描画テストに関する基礎的研究 2—大学生の人物画— 埼玉学園大学紀要 人間学部篇、第7号、127-132.
- 高橋雅春 (1974). 描画テスト入門—HTPテスト— 文教書院
- 田辺昌吾 (2010). 保育者養成カリキュラムに関する一考察—養成カリキュラム改革および男性保育者養成に焦点をあてて— 四天王寺大学紀要、50、237-248.
- 高嶋景子・安村清美 (2006). 「男性保育者」研究の動向—男性保育者に求められる資質・役割に関する研究動向とその展望— 田園調布学園大学紀要、第1号、139-152.
- 全国保育士養成協議会 (2007). 全国保育士養成協議会平成19年度会員名簿